
Just a friend.

皐月 誘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Just a friend .

【Nコード】

N7889C

【作者名】

臯月 誘

【あらすじ】

このお話は、素直になれない事が原因で始まるすれ違い…そして、その後の2人の成り行きを描いた「両思いのような片思い恋愛」の話です。皆さんには異性の大親友っていますか？大切な人。そんなのは当たり前…。でも、それは…本当に友情ですか？

1 / 3人の事（前書き）

第1話にあたる今回は…登場人物の紹介です。

とは言っても、もちろんここも含めて「Just a friend」なので、ストーリー形式で書いてみました。

次の話にも続くので是非読んで下さい。

感想なども大募集です

1 / 3人の事

『彼氏にするのなんてもつたないでしょ？』
いつも言っていた言葉は自分に対しての言い訳。

『あいつは俺にとっては特別な人だから。』
それはあなたが唱える甘くて、苦い呪文の言葉。

l o s t a f r i e n d .
〜3人の事〜

接客を学ぶ専門学校に進学して1年が過ぎた。

将来は立派なホテルスタッフになるんだ！って夢見る私、
藤原優音
はもうすぐ20歳

「来週私の誕生日だよ！ちゃんとお祝いしてよね」
20歳の誕生日は人生に1度きり。

そんなの…当たり前前的事だけど、でもやっぱり20歳は大人の仲間
入りって感じて嬉しいものだ。

「優音…。もう、それ10回は聞いたよ。」
もう、うんざりって顔でコチラを見たのは原口薫。
彼女は専門学校
に入ってから知り合い、今では大親友だ。

薫とは将来の夢の話から恋の話まで、何でも話してしまう。
まるで出会ったのが、たったの1年前なんて嘘のようだ。

「どうせ優音のことだから、肉でも食わせてればいいんだろ？俺も
焼肉行きたいし」

笑顔でそう発言したのは上野秀司。
彼も薫に匹敵する程の大親友で、
恋の相談はいつも薫と秀司に聞いてもらう。

「肉は嫌だ。つてか、秀司の食べたい物は全て嫌だ！私のお祝いなのにく。」

「はいはい。優音もいい加減わがままばかり言わないの。ちゃんと私と秀司で相談して決めとくから。」

「薫がそう言うなら…。」

「じゃあ、やっぱり焼肉だな。」

「秀司は黙ってて！」

私達は1年前に出会った時から、こんな感じ。

卒業したら海外のホテルでフロントをして、将来は日本に戻ってフロントマネージャーをするのが薫の夢。

フレンチやイタリアン、日本食などの色々なホテルのレストランで働いてソムリエールの資格を取り、レストランマネージャーになるのが私の夢。

営業や人事、ホテルで言うところの裏方を経験して、1つのホテルを任される総支配人になるのが秀司の夢。

そして、私達3人の共通の夢はいつか3人でタッグを組んでホテルを経営する事。

周りの誰がバカにしようが、気にならなかつた。

薫は英語がペラペラで、顔良し。頭良し。1つ難点をあげるなら、少しドジなところ。

秀司はアホっぽいくせに、実は全て計算した上での行動で、世渡りの上手さなら誰にも負けない。

そして私はと言うと…頭が良いわけでもないし、計算が得意なタイプでも無いけど…根性と向上心だけは誰にも負けない自信がある。

「うわあ…俺、バイトなの忘れてた！先に帰るなあ。また明日」
「…ばいばい。」

入学してからはずっと3人で一緒にいる。
もちろん、それぞれ他に友人はたくさん居たけど…3人でいる事が
もちろん最優先。

「んで…優音は就職どうするんだっけ？」

手に持っていた雑誌をパタンと閉じて、薫が言った。

「うーんと…第1希望はロイヤリテイホテル！」

「ロイヤリテイホテルって…秀司と同じところ!？」

「ああ、まあね…秀司がマネしたんだよ。」

「秀司も優音がマネしたって言うよ…きっと。と言うより、あなた
達2人まだ付き合っていないの？」

それは聞き飽きた質問で今更驚きもしない。

「薫まで…いつもも言ってるじゃん。秀司はそんなんじゃないんだっ
て。何て言うんだろ？もう、男じゃないって言うか…彼氏にするの
はもったいないでしょ？秀司は将来ビジネスパートナーにするの。」
いつもと同じ様な返答。

「そんな事ばかり言っていると、大切なもの掴みそこねるよ？」

ただ違うのは、相手が薫って事。

そして、薫は私の大親友で、何でもお見通しな事。

そう。薫はなんだってお見通しだ。

きっと私の気持ちもわかっている。

私ですらわからない、私の気持ち。

秀司に対する私の気持ち。

恋とか…友情とか…愛とか…。

とにかく私にとって秀司は大切な人。

今はただそれだけ…。

1 / 3人の事（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます！

第1話なので全然本題に迫れてません：すいません。次からはもつと本題に近づきます。

今後も読んで頂けると嬉しいです。早めの更新目指して頑張ります

（o^ - ^o）

2 誕生日の約束(前書き)

少し短めですが、3人が知り合った頃の話です！
評価などポチポチしてくれたら、泣いて喜びます (^| ^)
(

2 誕生日の約束

「2人って付き合ってるの？」
そんな質問される様になっただのはいつからだっけ？
きっと2人が出会った頃から…。

Just a friend .

〈誕生日の約束〉

私達が出会っただのは入学式。

出会った理由は単純に席が近かった事。

それから、秀司とは通っていた高校が近かった事を知り、共通の友達の話で盛り上がって、すぐにアドレスを交換した。

メールを交換し出すと、意気投合するのはすぐで、一緒に授業を受けたり、2人で遊びに行く様にもなった。

そんな1年生の5月に聞かれたのが一番最初だったと思う。

「優音ちゃん、今日も秀司君と帰るの？」

「うん！途中まで薫も一緒だけどね。あいつ、自転車であつてから送ってもらった。」

「ってかさ…秀司君と付き合ってるの？」

その時、そう言った友人のニヤケた顔は今でも覚えている。
なんでそんなにニヤニヤしてるんだろ…？

そのぐらいにしか思ってた。

だって、秀司を男だと意識した事なんてなかったから…。

「そんなはず無いつて。秀司と私とか…あり得ないでしょ。」

「えー。お似合いなのに。」

お似合いって…他から見たらそういう風に見えてたの…？

「ねえ…私と秀司って付き合ってるみたい？」

秀司がコンビニに飲み物を買に行ってる間に、薫に聞いてみる。

「付き合ってるのは知ってるけど…周りは付き合ってると思ってる力モね。ってか、両思いなんでしょ？」

両思い…？

「……。」

「えっ、違うの？」

薫が驚いてる事が、私にとっては驚きで…

「わからない。秀司の事…男だと思ってなかった。」

なんだか、私がバカみたいだ。

「お待たせ！無駄にお菓子買ったから、食べようぜ…ってどうした？」

その場に不似合いなテンションで秀司が戻って来た。

「何でもないよ、バカ秀司。」

「俺はバカじゃねえ！そんなん言ってるよ優音にはお菓子やらないぞ。」

秀司のバカなテンションに気が晴れて行く。

気にする事ないや！今はこれで楽しいんだし。

『なあ、もうすぐ優音の誕生日だろ？どうせ誰も遊んでくれないんだから、俺と映画でも行こう』

そんなメールが来たのは、その日の夜だった。

別に誘われなくても誕生日は薫や秀司と過ごすつもりで居たのだから、我ながら図々しい話だ。

『誕生日までに彼氏が出来なきゃ、しょうがないから映画付き合っ
てあげる。』

誕生日までに彼氏なんて出来るはずもないけど…あっさりyesと答えるには、私は意地っぱりなのだ。

『じゃあ、映画決定だな』

『バカ。誕生日までに彼氏出来ちゃうカモだよ（笑）』

『はいはい。絶対に無いですから…笑』

ああ、こういう時は秀司の存在が凄く心地いい。

冗談言ってる時。

バカにしあってる時。

夢を語る時。

グチを聞いている時ですら、秀司といると心地よいのだ。

でも…それはみんなの言うような恋愛感情じゃない。…たぶん。

この時はまだ、自分の気持ちなんかわからなくて…考えようと思し
てなくて…。

3 告白(前書き)

微妙に動き出し、微妙にズレだす2人の関係。
評価とかしてくれと、泣いて喜びます(^ 0 ^)

3 告白

「誕生日には一緒に映画に行こう。」
最初に約束を破ったのは…私だったね。

Just a friend .
（告白）

秀司と一緒に映画に行こうって言うてくれた事は、嬉しくて…でも、そんな秀司が与えてくれる喜びは私にとっては珍しさのカケラもない日常的なモノで…。

「あの…少し話があるんだけど…いい？」
だから気付かなかったのかな？

「うん。杉原君からの電話なんて珍しいね。どうかした？」

それは誕生日へと日付が替わりそんな深夜の事。

私は同じバイト先の杉原君からの着信に少し驚きながら、電話に出た。

杉原君はバイト先では数カ月先輩で、年齢も私より2つ上だけど、凄く優しくて年上なんて、気を使わなくてもいい人。たまにメールはするけど…電話は今日が初めてじゃないかな？

「誕生日だろ？おめでとう。一番に言いたくて…。」
誕生日を祝われて嫌な気分になる人間なんていないもので、私もつい嬉しくなった。

「ありがとう。でも、それだけで電話くれるなんて」

「いや…それだけじゃないんだ。突然こんな事言うとおかしいと思われるカモしないけど…俺、優音ちゃんの事が好きなんだ。付き合って欲しい。」

一瞬頭が真っ白になって…次に浮かんだのは秀司の顔。

私は首をフルフルと横に振り、頭の中から秀司を追い出した。きつと、誕生日までに彼氏なんか出来ないって話をしてたから…だから秀司の顔が浮かんだんだ！

「あの…突然すぎてビックリした？」

私が何も喋らないので杉原君の不安そうな声が受話器から聞こえた。そして私はやっと杉原君の事を考え出す。

私は杉原君の事…嫌い？

いいや。杉原君は優しく、頼りになるし、好き。顔も…カッコイイ分類に入る。

何を迷う必要があるんだろう…？

「うん、少しビックリした。でも…よろしくお願いします。」
受話器を片手にペコリと頭を下げた。

「本当に！？よかったあ。俺、すげえ緊張した…。絶対駄目だと思つてたし。」

杉原君の楽しそうな声を聞くと、何だか嬉しくなる。

これから彼氏彼女として…大丈夫。やって行ける！

「駄目なんて…そんな事ないよ。」

「そう言つて貰えると嬉しいけど。あつ、明日…つて、もう今日だよな？今日つてデートとか出来ない？もう友達と約束とかある…？よな？」

約束…。

「俺と映画でも行こう」

「彼氏が出来なきゃね。」

秀司との約束…。

「ああ、うん。大丈夫だよ。友達も…たぶん大丈夫！」

「本当に？無理すんなよ？」

「無理じゃないって！友達もきつと彼氏と遊べつて言つと思つし。」

「そっか。なら、また明日連絡するな！おやすみ。」

「うん おやすみなさい。」

そこで電話を切る。

つてか…誕生日までに彼氏出来ちゃったじゃん!!
電話を切ってから、突然顔が火照ってきた。

『 』

そこにもう一度着信が鳴った。

誕生日はいろんな人が連絡くれて嬉しいな。

私はケータイの画面で誰からの着信かを確認してから、電話を取った。

「もしもし、秀司？」

「おお、やっと繋がった…。誕生日おめでと」

「ありがとう やつとつて…何回か電話くれたの？」

「ああ…何回もかけたよ。映画の予定も決めて無いしな！」

「あつ…映画なんだけどさ…。」

「どうしたんだよ？」

「実は…彼氏が出来たから行けなくなりました。」

「……………」

「秀司？」

「マジで…？」

「マジで。」

「……………そっか。マジで誕生日までに彼氏作るとか、お前凄いな」

「ああ、誕生日はデートだな。楽しんで来いよ!!」

「うん ありがとう。」

「じゃあ、また学校でな。」

「うん。バイバイ」

なんだ…やっぱり秀司は全然怒らなかつたな。

つて言うより、凄いとかわれちやつた

やっぱり凄いやね？

誕生日に告白されるなんて!!

ああ…明日は何を着て行こうかなあ？

杉原君との電話を切った後の私は浮かれっぱなしで…、いつもなら
気付ける秀司の微妙な変化に気付かなかったよね。

あの誕生日の日に、もし約束通り映画に行っていたら、今の私達って
どういう関係だったかなあ？

3 告白（後書き）

薫が完全に忘れられてるケド…そろそろ優音に絡んできます。
秀司の気持ちや杉原君の事も少しずつ文章にして行きたいです

4 バカな2人 side 薫

私から見た2人と言うのは…ただのバカカップルで、2人で1セット。だから…去年の誕生日に嬉しそうに彼氏の話をする優音をなんだか信じられない気持ちで見てたんだ。

1度絡まった糸はそう簡単に取れないものだね…。2人は今もまだ素直になれないまま…。

Just a friend .
バカな2人 side 薫

「は？」

私は飲んでいたお茶を吹き出しそうになるのを堪えて、優音を見た。

「だから、彼氏が出来たんだってば！」

「秀司じゃなくて？」

「違うよ。ってか…秀司はないでしょ。同じバイトの杉原君だよ」

「秀司はないんだ…。ってか、杉原君って誰よ。」

ああ…哀れな秀司。

「杉原君は杉原和馬すきはりわかづまって言って、1つ年上で…とにかく優しいのでも…。」

「でも？」

「あっ、何でもない。」

フルフルと首を横にふる優音。

何かあることくらいはスグにわかる。

本当に優音は単純だ…。こついう時はあと1押し、2押ししたら白状する…。

「何でもないって…。」

私が言いかけた時だった。

「おはよー!」

朝から何故こいつはハイテンションなのだろう? 秀司はいいやつだけど…こういうタイミングの悪いところは使えない。

「おはよう。秀司」

「おはよ。秀司、あんたいいところに来たわね。」

「ん?」

「朝から優音のノロケ話に捕まって大変なのよ。」

「あつ、薰ひどい…。傷ついたあ。」

そんな感じで優音の出したヘルプサインを最初に見落としたのは私だった。

「じゃあ、デートなのでお先に失礼します お疲れ様。」

優音が笑顔でそう言い残し帰ったのは、いつもなら3人で寄り道する放課後。

「…これは相当はまってるね。んで…私達はどうする?」

秀司の様子を見る限りでは聞く必要もない質問だったみたいだ。

「俺…今日は帰る。」

「ねえ秀司! 秀司はどう思ってたんの? 優音の事…。」
しばらくの沈黙の後、秀司がゆっくり答える。

「なんかさあ…バカっぽい。俺…何してんだろ?」

「私は…秀司が優音の誕生日は2人で行かせてって言うから…てつきり秀司は告白するんだと思ってた。」

「その…つもりだったけどさ。まあいいや。俺も彼女でも作るうかなあ。」

ああ、本当に可哀想でバカな秀司…。

でもバカだけなら優音の方がバカだよ…。

これが2人の最初のすれ違いで…あの時の私なら絡まりだした糸を
ほどく事が出来たカもしれない。
それも今になってからの後悔でしかないけれど…。

5 やきもち

もしあの時…私が自分の感情を素直にヤキモチだと認めていたら…
そんな後悔を何度しただろう？

例えば、今…私が自分の感情を素直に口に出来たら、あなたはもう
1度振り向いてくれますか？

Just a friend .

「ヤキモチ」

「」

流行りの着信音を鳴らすのはシンプルな私の携帯ではなく、ストラ
ップが大量に付いた彼氏の携帯電話。

「ねえ和馬君…出ないの？」

時々デート中にこういう事がある。

しつこいくらいに鳴り続ける電話を和馬君がサラッと無視してしま
う。

「ああ…別に急ぎの用じゃないし。」

いつものセリフ。

「別に私に気をつかわなくていいんだよ？」

「ありがとう。それより今日はどこ行く？」

「別にどこでも…。和馬君はどこ行きたい？」

「…なら、俺の部屋おいでよ。」

いつもの返事。

付き合い出してから、外でデートしたことなんか数回。

それ以外は毎回1人暮らしの和馬君の部屋。

やる事だっ…いつも決まっ…男と女がするよ…

私はもう気付いている。

私からの電話：鳴らしても、鳴らしても時々出てくれないのは何で？
急ぎの用じゃないから？

いつもデートが部屋ばかりなのは何で？

他の人に見られちゃ不味いから？

それとも：本当は身体目当てで一緒にいるの？

私：知ってるんだよ？

他の女の子とデートしてるのは：何で？

遊びだから？

それとも：私が遊びなの？

交わる事に喜びなんて感じれないまま：ただ悲しくなっていく。

「ねえ：少し聞いて欲しい話があるんだけど。」

今日は久しぶりに秀司と帰ってる。

最近、和馬君が会ってくれる回数が目に見えて減った。

「杉原和馬の話？」

「そうだけど：人の彼氏フルネームで呼び捨てにするのやめてよ。」

「ってか、俺も優音に話があるだけど。」

自転車で二人乗りをしているので秀司の背中しか見えないけど、真
剣な声。

「ん？なにになに？先に聞くよ。」

「俺：彼女出来た。」

…。

…。

…今、何て？

思考回路をフル回転させてやっと出て来た言葉は

「誰？」

の一言。

「A組の如月結子。」

如月…結子。

知ってる。知ってると言っても話したこともなくて、本当に知ってるだけ。

隣のクラスの彼女はビツクリするくらい細くて、女の子らしい子…私が知っているのはその程度。

「へえ結子かあ。」

もちろん呼び捨てにする様な仲じゃない。

「優音だつて俺の彼女呼び捨てにしてるじゃん…。ってか、俺の話は以上。優音の話は？」

シヨックだった。

原因は不明。

ただシヨックだった。

秀司が私が全く知らない人と付き合うなんて思ってなかったから。

秀司が誰かと付き合うなんて全く想像していなかったから。

どんな子なんだろう？

2人はどういう風にデートするんだろう？

結子は秀司を何て呼ぶんだろう？

私たちは…どうなっちゃうんだろう？

これってヤキモチ…？

「私の…話は…。」

彼氏が浮気してるかもしれない…。

「なんだよ。言えつて。」

秀司に言つて、どうして欲しかったんだろ。

今は…惨めになるだけだ。

「ただのノロケ話だよ。でも今日は秀司のノロケの方が聞きたいお姉さんが何でも聞いてあげるよ！」
わざと強がる。

私がかこれ以上傷付かないため。

「誰がお姉さんだよ。言うなら妹…いや、ペットだな！ポチって感じ」

「誰がポチよ！」

今なら…秀司の親友のまま居れる。

それで充分じゃん。

私は…ヤキモチなんて妬いてない。

今なら素直になれるのに…。

6 浮気

助けて欲しかった。

でも、助けてと言うには私はあまりにも自己中心で…。

ねえ、優しくなんてしないでいいから。

女の子扱いなんてしないでいいから。

せめてバカな私を笑って下さい…。

Just a friend .

〈浮気〉

「ええ。優音と秀司は絶対に付き合ってると思ってたのに!」

今日も誰かがそう言って驚いていた。

それはただの勘違い。

「だから…秀司とはただの友達だって言ってたでしょ。」

「でも…絶対にお似合いだよ!」

「…そんな事言ってる、私が結子ちゃんに怒られるよ。」

実際に結子が私と秀司の仲の良さを不安に思ってるって噂は耳にしている。

結子も何をそんなに心配しているのだろう…。

私と秀司はただの友達。

秀司は登下校時、休日などほとんどの時間を結子に費やしているでは無いか…。

本当に…よくやるよなあ。

結子は秀司の何が不満なのだろう?

和馬君に秀司を見習わせたい。切実にそう思う。

幸せな秀司。

一方私はと言うと…遂に見てしまった。
他の女の子と手を繋いで歩く和馬を…。

いつも私が居る場所にただ他の子がいるだけなのに…その事実がただ悲しい。

「この前…和馬、知らない女の子と歩いてた。あれ…誰？」

情事の後のベッドタイムで聞く質問じゃないとは思ってたけど…この時間しか、和馬が自分に向き合ってくれない気がした。

「ん？いつの話？」慌てる素振りも無く、答える和馬。

そんな和馬が知らない誰かみたいに見える…。

「3日前。」

あれから3日…凄く悩んだ。

和馬にとって私って何？

薫には言っていない。言ったら、別れるって言うに決まってるから。

秀司には…言えない。なんでかは分からないけど…言っちゃ駄目な気がする。

「うん。それで？」

「それでって…？」

「それがどうしたの？」

ソレガドウシタノ…？

「ねえ、薫…。浮気って駄目なこと？」

翌日の学校で私は薫に尋ねた。

「はあ！？優音が浮気…？まあ、優音がそこそこモテるのは知ってるけど…まさか…相手は秀司？いや、あいつはあれで良い奴だし…。」

などとブツブツ呟く薫。

「どうでもいいよ。それより浮気の何が駄目なの？」

「…開き直った。優音…。もし、あんたが杉原和馬と別れてまで秀司が良いって言うなら止めないよ。でも…浮気は駄目。」
相変わらず勘違いを続ける薫。

「浮気は駄目かあ。」

その言葉を聞けただけで充分だ。

別れたい。

正直…辛い。

私は彼氏の浮気を許せるほど…強くはない。

でも…今、和馬と別れたら？

休みの日は何するの？

放課後は？

秀司は…結子のもの。

私は…いつの間に1人ぼつちになったんだろ…。

「一馬君…。私、一馬と他の女の子が遊ぶの嫌だなんて…。」
何に期待してたんだろ？

「じゃあ…別れる？」

期待は絶望を大きくするだけなのに…。

「それは…、それは嫌。ごめんね？もうワガママ言わないから！」
私は何て弱いんだろ？

悲劇のヒロインにでもなるつもりなのかなあ？

私の頭を撫でる和馬の手の冷たさを、私はポーツと感じていた。

7 夏期研修

もう好きかもわからない自分に必死に好きだと言いつけさせる。
自分を偽る事は…ほら、こんなにも虚しい。

Just a friend .

（夏期研修）

「えっ！じゃあ、薫は夏期研修参加しないの？」

夏期研修 うちの学校で行われる1年生を対象にした夏休みのリゾートホテル研修で、参加は自由だが給料が貰える事からも参加率は高い。

「うん。別に今続けてるバイトだけで充分だよ。」

「そんな…薫と同じ研修先にしようと思ってたのに…。あつ、じゃあ秀司は？一緒にいこうよ。」

「ってか、俺も夏期研修は参加しないでこっちのホテルでバイトする予定。」

シラッと答える薫と秀司に余計に腹が立つ。

「だって、秋になったら半年の研修だよ！お金だっているしさあ…行こうよ。ね？」

夏期研修が終われば、いよいよ次は半年間のシティホテル研修。

無給の所が多く、ホテルの寮で生活になる…。

たぶん半年は薫とも秀司とも会えないんだろう。

「私は研修に向けてコツコツ貯めてるから、夏期研修は必要ないの。」

「俺は…なんだかんだ言つて結子がいるしなあ。」

2人とも人の気持ちも知らないで…！

「もおいいい…！」

つてわけで、あつと言つ間に夏になり夏期研修が始まりました。

「1ヶ月半よろしくね。」

「こちらこそ。優音と同室って不思議な感じだけど。」

ホテルの寮で1ヶ月半の生活をともにするのは福田^{ふくだ} 真貴^{まき}。

同じクラスで普段から割りと喋りはするが、2人で行動するのは初めての体験だった。

「で、優音の彼氏は年上だっけ？」

「ああ…、うん。一応。」

夜になると女の子が話す内容なんて恋の話ばかりだ。

今の私には…痛い話題。

もう一馬と3日も連絡がつかない。

「一応つて…。」

真貴は私のどんな話だつてニコニコと聞いてくれる。まあ、自分の事は一切話題にしないけど…。

『~~~~』

不意になつた自分のケータイに驚きながら手を伸ばす。

なんで…？

もう3日聞いてない一馬専用の着信音。

「彼氏さん？」

「あつ…うん。あの…ちょっと…。」

「いいよ。行っておいで！これから6週間も一緒に過ごすのに、そんな遠慮いらないうて。」

「ありがとう。」

真貴を気にしながらも、廊下に出て通話ボタンを押す。

「もしもし…一馬？」

『……………』

リゾート地は電波が悪くて困る…なんて思いながら、寮の入口まで

出る。

「一馬？もしもーし。」

『ああ、やっと繋がった。もうホテル着いたの？どんな感じ？』

「うん。配属先はレストランになった！明日の朝から仕事だよ。一

馬こそ…3日も連絡くれないなんて…何してたの？」

『ん？秘密。』

「どうせ女の子と遊んでたんでしょ？」

『まあな。』

……ちよつとは否定してよ。

ケータイを握る手に力がこもる。

「そっか。」

『あつ、俺さあバイト休み取ってそっち遊びに行こうかなって！』

「えっ、来れるの？」

『考えとくよ。じゃあ、またな。』

プツプツと無機質な機械音が響く。

電話が切れた後のこの音が嫌い。

一人ぼっちになったみたいで…。

私は切れたばかりのケータイをいじって、あいつの電話番号を呼び出した。

『上野秀司』

プツプツ…と短い機械音に呼び出し音が続く

『もしもし優音？どーした？もお俺に会いたくなっただか？』

すぐに秀司の明るい声が聞こえた。

「バーカ！夏休み入って死んでないかと思って、わざわざ電話してやったんでしょ？」

そんな秀司の声に無駄に安堵してしまう。

『わざわざ、どうも。でもまだまだ死ぬ気配も無いから仕事に集中しろよ。』

「仕事は明日からのの！」

『配属はもう決まったのか？』

「うん イタリアンレストランなんだ！」

『やけに嬉しそうじゃん。カッコイイ先輩でもいた？』

「へへっ…実はね。調理師さんの制服がかっこよくて」

『変態かよ…。何かあつたら杉原一馬にチクるからな。』

「はいはい。アドレスも知らないくせに。」

『あつバレた？まあ羽目を外すなよ。ってか、俺これからデートだから…また電話するな』

「あーはいはい。デート楽しんで来てね。」

ブツツと電話が切られる。

一馬との電話を切った時よりもっと切ない。

「でも…一馬が会いに来てくれるって言ってた」
独り言のノロケ。

バカだつて分かってるけど…一馬の一番は私だつて、まだ信じてる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889c/>

Just a friend.

2010年10月28日01時23分発行